

図書館だより

第17号

1988. 4. 1 発行

ISSN 0592-32-2342

編集兼発行 三重短期大学附属図書館 514-01 三重県津市一身田中野字蔵付157

目次

スチューデント・アパシーについて	廣 崎 勇 ... (1)
初 づ め	北 川 公 子 ... (4)
科目別基本図書について	立 石 雅 彦 ... (5)
科目別 基本図書一覧	(6)

スチューデント・アパシーについて

廣 崎 勇 (講師)

現代青年の中には、人並みの悩みはあるが適度楽しく割に平穩に青年期を過してきたという者が次第に多くなっている、とされている。しかし同時に、一見平穩に見える青年の心の裏側にも浸透してきている無気力症をも見逃がすわけにはいかない。否むしろ、青年期の特徴と言われ、大人たちから青年たちに向けて言われ続けた無気力症ないし三無主義(無気力、無関心、無責任)あるいは四無主義(無感動)が大人や低年齢の者(児童-生徒)たちをも飲み出しているという方が実感ではなからうか。

スチューデント・アパシー(student apathy)とは、アメリカのハーヴェード大学メンタルヘルス・サービスのウォルターズ(walters, P, A, Jr.)が、1961年、アメリカの大学生の中に男性的同一性の形成をめぐる葛藤から青年期を引き延ばしている(現

象的には大量の留学生出現)一群のあることを見出しこれに名づけたものであり、その状態像として、情緒的な引きこもり、競走心の欠如、社会的参加の欠如、社会的活動の停止、空虚感などが指摘されている。(邦題『学生の情緒問題』石井完一郎監訳、文光堂)

日本では、昭和30年代おわりから40年代の初頭にかけて突如として出現した大量留年現象以降増加した留年学生問題を検討していく中で、旧来型の留年生とは異なる意欲減退型の神経症タイプの留年生がみられるという指摘から注目され始めた。(丸井文男、1967など)

しかし、ヨーロッパ圏ではアパシー症状を中心的特徴とみなすアプローチは今のところほとんど注目されていないようである。

学生のアパシー現象は、登校拒否の場合と同様に、まずアメリカ文化圏で特徴的にみられ、ついで日本文化圏でみられるようになってきた現象と考えられ、多分に物質的豊かさ、大学生の大衆化現象などの社会現象との深い関連の中

で出現してきたもので、学校生活における状況、とくに学校制度、そこでの支配的な価値観、さらには、それらを支える社会状況、社会を支える価値観などの要因を抜きにしては考えられないものである。

スチューデント・アバシーの特徴を1977年笠原嘉（『青年期』中央公論）は次のようにまとめている。

- (1) 好発期は青年後期から前成人期（17歳～30歳）であり、大学生に最も多く、とりわけ入学初年度後半と卒業年に集中している。
- (2) ほとんどが男性であり、前駆的形態として登校拒否をみることができる。
- (3) 知的には平均以上の水準にある。
- (4) 几帳面で、完全主義的傾向を備え、いわゆる「強迫性格」をもつ。一種の正義漢的潔癖さがあり、若者文化としていわれる無気力、無関心とは区別される。
- (5) 近親者の中に俗にいう偉い人をもつ。ただし、貧富や学歴とは無関係である。
- (6) 無関心、無気力は専門の学業分野に対してだけであり、本業以外（趣味やバイトなど）では平均以上の活動性を示すこともまれではない。
- (7) 優秀劣敗に対して過敏であり、あらかじめ劣勢が予想される場合には関与を差し控えてしまう。
- (8) 究極的には「自分とは何か」という疑問に捉われ、アイデンティティの確かさを求めて自問自答している。
- (9) 自分から他者に助けを求めることをしない。特に、確かな（と思われる）アイデンティティをもった成人や同僚（同級生）グループには近づきたがらない。

原因としては、受験競争後の意切れ現象、大学生活の中に積極的目標をみい出しえないこと、大学での学究生活への不適応（不親切な学習指導）、入学時における進路への不満（第1次志望でない時）、地方からの上京等による孤独感

から小さな失敗にも大きく自信を失いやすいこと、などが指摘されている。

青年期の時代特性として、学園紛争の項からの推移をみれば、闘争的人間、三無主義の人間、さらには無害人間へと展開してきているようにみえる。生まれた時から過保護に育ち、進むべき進路や生き方についても周囲がたえず先回りしてお膳立てしてくれるため、一人では何もできず、またやろうともせず無気力になっていく。確かなものを社会の中に求めることができず、自己の内部に求めても確たるものは何も見出せない、という閉塞された状況の中で無気力にならざるをえなくされていると思込んでいる。これは思い込みであるだけでなく一面事実でもあろう。しかし反面、生まれた時から経済的繁栄の中で生活し、一般に自主性を伸ばすことができなほどの過保護の中で育ち、自主的自律的行動の体験に乏しく、自分の本当に好きなことに熱中することなく成長してきた。受験を中心とした生活ではたえず成績、序列を気にせざるをえない状況に置かれている。大学生になり、自由を得たとしても何をやるべきかわからない。自己の価値に不確信となり、勤勉、努力、責任といったものへの一種の抵抗として、しかし、より本質的には逃避として、本業以外のものに打ち込み、大人からは無為に過ごす生活に浸ると非難される。当人も、そのことに気づいているかぎりにおいて、心からの充実感は得られず、逃避行動の悪循環に陥る。

本学の学生諸君にはさして見うけられるとはいえないが、私自身ここまでまとめてきて、随分と心あたりがある。記述されている全てといわないまでもどこかに心あたりがある諸君は少なくないであろう。アバシーを克服するには「自分の目標はこれだ」という確固としたものをつかむことであると言われている。生きがいを見つけた時、おのずから熱中や傾倒のエネルギーが湧いてくる。

しかし、自己の目標もわかっていながら、不確信からアバシー症状に陥ることなども少なくない。こんな時はやはり、「人に勝つより己

れに勝て」、自己の精神的な力を強くするに限る。と同時に、考え込み、減入るよりも、身体を動かすことである。

「健全な肉体に宿れる健全な魂」と言うてはなにか。前号での刀根教授が指摘されていたように散歩することでもいい、身体を動かし新鮮な空気を吸うだけで活力が漲ってくるものである。ソクラテスでも某元東大総長がいったように「やせた哲人」であったのではなく、プラトンの『饗宴』に記されている限りでは、てっぺりと太った、三日三晩徹夜で飲み食べ語りあかすほどの体力の持主であったからこそ、偉大な哲人でありえたのであろう。

さて、もどって、精神的な力をつけるとは、教養を身につけることであり、感性と知性を磨くことである。教養の糧は知識だが、単なる量的蓄積が教養を形成するのではない。知識を自ら血肉として、自分のはからいで自分を動かす主体性を身につけていってこそ教養となるのである。すなわち人格化された知識といえよう、そこには広さと深さ、創造性、時代性が求められる。三木清によれば、「教養といわれるものは、専門的乃至職業的知識であるよりも、一人間を真に人間らしくし、人間性を完成するために必要な普遍的知識である」という。

教養を独語でいえばBildungとなるのであるが、教養形成、自己成長をもつばら主題としたBildungsromanと呼ばれる一群の小説がある。独断と偏見にもとづいていくつか列挙すれば、ゲーテ『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』、『同遍歴時代』、マルタン・デュ・ガールの『チーボー家の人々』、ロマン・ローラン『魅せられたる魂』、ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』、オストロフスキー『鋼鉄はいかに鍛えられたか』、トマス・マン『魔の山』、わか国では、倉田百三『出家とその弟子』、井上靖『しろばんは』、下村胡人『次郎物語』などがあげられよう、こうした小説を読むことからえられる自己教育力は偉大なものがある。しかし、おのずと生じてくるわけではない。課題意識をもち、考えながら読み進めていくことが

大切だ。教養の形成によって得られる感情の細やかさ、それは人間にとって空気のように必要なものだが、それは思考の細やかさ、知性の豊かさからもたらされてると考えられている。

「感情は思考から生まれ、思考はそれをはぐくみ、思考によって感情が生きているのです。思考の豊かさのおかげで、人間の感情は精神世界の自律的な力になります。そして、感情は人間を高貴な行為へとかりたてるようになるのです」さもなくば、思考の貧弱さを「本能の暴動」によって補い、粗野な感情のなすがままに委ねることになるでしょう（スホムリンスキー）。

教養を形成し、感情の細やかさを育成するのは、何も書物にあるだけではない、生きた人間の中で友情を育くみ、精神的交流を行うことによって最も形成されることは言うまでもないことのように思われる。

青年期は、社会的に半自立で学習期間にある。それゆえ、様々な責任から免がれて「モラトリアム」である。モラトリアムであることからアパシーが生まれる等々否定的に言われることも少なくないが、モラトリアムの課題は自己形成にある。多くの良質の書物や人物や事件に出会い、くふれあい、またそれを仲間集団の中で、また教師と学生とでくわちあひ、こうしてお互いをく育ちあひ（育てあひ）をしていこうてはないか。すぐれたく出会いをいくつか組織できるか、短大生活のわずか2年（余）の間に、そこに学生諸君の課題がある。まさに人生は苦しんで生きるねうちがあるのである。

Freuden durch leben（苦難を通じての歓喜）。

悩める青春を送っている同志諸君、苦境というものなしの人生は一人の人にも可能とされていなくてあれば、あえて甘受し、それらの希望と方向を発見し、凌ぎ前進していく方途を、様々なく出会いの中から見つけだそうではないか。（完）

初　　ゆ　　め

北川 公子（家政科助教授）

図書館だよりへの寄稿をお引き受けしたのを機に、自分の専門とする「食物・栄養と健康」の食物・栄養を離れてこれを読書に代え「読書と健康」について考えてみることにした。（ちなみに、私の講義担当科目は栄養指導論、食生活論及び栄養学各論などである）。この両者の関係は一見うすいようであるが、改めて考えてみると極めて密接ともいえそうである。以下、読書と私の健康とのかゝりについて思いつくまゝに記してみることにする。

私の読書の対象は、大きく二つに分かれる。それは仕事に関するものとそうでないものである。前者には、健康について書かれたものが数多くあることはいうまでもない。そして読書することにより得た知識を生かして健康管理に役立てるという意味では、読書と健康が直結している部分でもある。専門書の読書はもちろん私にとって必須であるが、ものの考え方、見方を広くし偏らないものとするために、いわゆる健康読本といわれる類の読書にも努めるように心がけている。例えば、最近のものでは「ごはん食こそ健康食」（鈴木正成著、家の光協会）であるとか「話題のオリエンタルダイエット大研究」（Olive 一雑誌一）の類までのごとくである。そのため、書店に立ち寄るときは必ずといってよい程その類の本を購入するのが常である。いつぞやも、人と待ち合わせの時刻までには少し時間があり、さてどうしたものかと囲りを見ると書店が目についた。近頃、少し遠のいていたこともあって早速そこへと足を運んだ。時間の制約がある中での本さがしには格好のこじんまりとした書店である。本棚に視線をやると「減塩を気にせず血圧を下げる暮らしの医学」という活字の背表紙が目につく。それを手に取って表紙を見ると「老眼から白内障ま

で目の成人病を治す最新の特效療法」という文字がさらに目にとび込んだ。「わたしの健康」

（主婦の友社）という月刊誌である。その他にも類似した雑誌が数冊並んでいたが、やはり最初に目に止まった「わたしの健康」を、つい買ってしまったという次第、むろん、いつも雑誌を求めるとは限らないが、いわゆる健康読本に類するものにもできるだけ目を通すようにしている。—しかし、この日はかりはこのことが後悔のもととなった。なぜならば、人と待ち合わせていたことをすっかり失念してしまっていたからである—さて、その後どうなったかは読者のご想像におまかせすることにして、話を本筋にもどすこととする。

これまでに読んだいわゆる健康読本の類のものの中には、私の見る限り明らかに誤っていると思われるものもあれば、これはほんとうかなと首をかしげたくなるようなものもないわけではないが、これだと思わず叫びたくなるようなとんだ捨いものをするこもしばしばである。そして、これを単に健康読本の類とみてもいいのかと思うほど、内容の充実した本が多いのにも驚く。「美しくなるための……」という類のタイトルは数多く見受けられるが、それらをもっと役に立てるべきであったと鏡を覗き込んで、ため息、というこの頃の私でもある。

ところで、いわゆる健康読本といわれる類の読み物のタイトルには、読者の関心を惹くことを追うのあまり、内容を誤解させるようなものが多いことがいささか気がかりなところである。先程の「減塩を気にせず血圧を下げる暮らしの医学」を例にとってみよう。これには「塩が高血圧の元凶だというのは、実は大きな誤解から生まれた常識のウソだった」というタイトルの一文が特集されているが、これをご覧になって皆さんはどう思われるでしょうか。塩と高血圧とは関連がないのかとお考えになるのではないのでしょうか。ところがさきならず、この一文を熟読玩味すると、食塩の過剰摂取が原因となって起こるタイプの高血圧は「けって数が多い

ものではありません……」とはいうものの、起
こり得るわけであり、また「塩分が原因の高血
圧ではない人でも、あまりに過剰に塩分をとる
と、わずかながら血圧が上昇することがわかっ
ています」とも原文には書かれている。やはり、
従来からいわれているように高血圧には食塩の
過剰摂取は何らかの関連があるわけである。こ
の類の読み物では、タイトルを鵜呑みにしないで本
文にも目を通す労をいとわないようにのぞみたい。

とかく、健康に関する多種多様の情報が、話
として耳から、活字として目から、次々と入っ
てくる現状では、どれもこれもが正しいもの
のように思えて戸惑うこともしばしばである。豊
川裕之氏は著書「食生活と健康」（大修館書店）
の中で、ロバを町へ売りに行く粉挽きの親子に
は、その道すがら出会った人々から耳にする話
のどれもこれもが正しく思われ、それらの意見
を全部もったもなとことごと次々に取り入れて行
動したところ、その親子がついには大切なロバ
までも失ってしまうという「グリム童話」の一
寓話を引用し、健康を考える場合にも、この種
の危険の存在に留意すべきことを指摘している
が、私も全く同感である。

故人曰く「少し学びしゆゑに大きに誤り、ち
とばかり知ったる故に、えらう惑う」（滝沢馬
琴）という名言も心にとどめておきたいと思う。

それでは、他方、仕事とは関係のない読書は
つぎの二つに分かたれるが、これらは健康とど
うかわるかを考えてみたい。

一つは趣味のための読書であり、いま一つは、
つとめてなすところの読書である。前者は、私
の健康とのかわりにおいて好ましい面と、い
さゝか好ましくない面とを持っている。好まし
い面は皆さんの想像に難くないと思うので省く
こととするが、好ましくない面とは何であろう
かと疑問に思われるかもしれない。まず、夢中
になり過ぎて睡眠不足の原因となることである。
推理小説を読むこと、これなどはそのよい例で
ある。論理を大切にすることでは自分の
専門分野と共通したところがあり、暇さえあれ
ば好んで読みたくなるものの一つである。推理

小説の愛読者にはよく理解していただけるもの
と思うけれども、読みはじめると他のことを忘
れてつい夢中になり読みふけてしまふ。好ま
しくない面は、まさにここにある。つぎの日の
眠いこと。精神衛生上から考えると気分転換に
は実に効果的である反面、はらはら、ひやひや、
どきどきしながらの読書は心臓にも無い。少し
考えて数えあげるときりが無い。

最後に、つとめてなすところの読書であるが
その大切さは、専門馬鹿にならぬためにも痛感
している。そこで、機会があれば自分の専門と
は全くかけ離れた書物であっても、これくらい
の本は私も読んでおかなければと少しでも思え
ば躊躇なく購入することになっている。しかし、
この類の本は、はしがきに目を通すのが精一杯、
読み切るなどは到底不可能といってよい多忙な
状態にありはなはだ残念である。それでは、こ
れらの書物の購入は全くの無駄使いかといえ
ばそうでもない。これらの読書の催眠効果は抜群
であり、この点において健康と読書は最も密接
につながっている。

この一文を漸く書き終えて眠りについたら、
積読の本のうちの何冊かに稀頼本として高値が
つき、大喜びをしている夢を見た。これが何と
私の初夢である。

科目別基本図書について

立石 雅彦

大学附属図書館の中心的役割は、教員の研究
と学生の学習のための資料を提供することにあ
る。本学図書館もこの目的を達成するべく努力
してきた。しかし、限られた予算の中では、常
勤の教員の研究用図書を優先させねばならず、
学生が個々の講義での学習に必要な資料への
配慮を十分にすることができなかった。昨年度
から、科目別基本図書を独立の費目として設
けることができるようになり、この面での立ち
後れは、徐々に解決されていくことになろう。

本年度も、各講義を担当されている先生がたのご協力を得て、候補図書を挙げていただいた。いずれも学生諸君の学習に不可欠なものはかりである。それらについては、できるだけ購入に努めたが、予算の制約から購入できないものもあり、来年度予算で実現する等の配慮をしていきたい。学生諸君が、このリストを利用し、講義の予習、復習、あるいは自主的な学習に利用されることを望みたい。

なお、科目別基本図書の制度を設けることについては、前図書館長尾崎正利先生のご努力によるところが大きい。尾崎先生は、そのほかにも本学の図書館の充実のため労を惜しまれず活躍された。昭和62年8月より私がその後をお引受けすることになったが、尾崎先生の残されたものさらに発展させていきたいと考えている。各方面からの、ご叱正、ご援助をお願いしたい。

科目別 基本図書一覧

文 学

評論 永井荷風 中村 光夫 筑摩書房
わが荷風 野口 富士男 集英社
猫の墓 一わが父夏目漱石 夏目 伸六 河出書房
父親としての森鷗外 森 於菟 筑摩書房

仏 語

レ・ミゼラブル百六景 廉島 茂 文芸春秋

独 語

ドイツ語学習辞典 信岡 資生 三修社

哲 学

哲学 井上 忠 弘文堂
テキストブック 西洋哲学史 渡辺 外編 有斐閣
科学革命の構造 クーン みすず書房

法 哲 学

ヘーゲル論 山田 忠彰 批評社
ヘーゲルにおける自由と共同体 柴田 隆行 地樹出版

社 会 思 想 史

マルクスと共同体 布村一夫 世界書院
初期マルクスの批判哲学 岩淵 慶一 時潮社

心 理 学

現代基礎心理 1 八木 晃 東大出版会
現代基礎心理 2 相場 覚 東大出版会

人 文 地 理 学

マクミラン世界歴史統計 II 日本 アジア
アフリカ編 マクミラン 紀伊国屋書店

英 語

ホームステイ英語 トミー植松 研究社
やさしい英会話 P. マクレーン 研究社

日 本 史

足尾鋳毒事件 上、下 森長 英三郎 日本評論社
裁判自由民権時代 森長 英三郎 日本評論社

民法 I

条解民法 III 高木 多喜男 三省堂
条解民法 IV 高木 多喜男 三省堂

民法 II

相続・贈与 泉、山崎、桜井 有斐閣

刑法

刑法の機能的考察 平野 龍一 有斐閣
女子少年院・女子刑務所 平野 龍一 有斐閣
斎藤 晴夫 他 有斐閣

刑事訴訟法

捜査と人権 平野 龍一 有斐閣
訴因と証拠 平野 龍一 有斐閣
犯罪報道の犯罪 浅野 健一 学陽書房

国際法

国際機構条約資料集 香西 茂 他 東信堂
ケースブック 国際法〔新版〕 大寿堂 鼎
有信堂

国際政治

欧米同盟の歴史(上) 土倉 完 爾 他 法律文化社

労働法

組合活動の法理 榎井 常喜 一粒社
労働法総論 本多 淳亮 青林書院

経済学

ミクロ経済学入門 西村 和雄 岩波書店
経済の常識と非常識 都留 重人 岩波書店
マルクス経済学の基礎理論 藤島 洋一 青木書店
経済理論入門 U. ヴァン、ミラー 学陽社
港湾経営論 西尾 一郎 創誠社
新企業論序説 西尾 一郎 税務経理協会

経済学原論

マクロ経済学 デュイリオ、E. A. マグロウヒルブック
ミクロ経済学 サルバトーレ マグロウヒル女子学社

経済学史

経済学の考え方 モーリス、レヴィ H B J
経済学の考え方 時永 淑 法政大学出版会

経済史

家 有賀 喜左エ門 至文堂
村の生活の記録(上・下) 中村 寅一 刀水書房
明治開化綺談 篠田 鈺造 角川書店

経済政策

経済計画論 夏目 隆 他 三和書房
ソビエトの経済改革 A. G. アガンベギャン ありえす書房
経済動学 S. R. パッド 丸善

国際経済論

ECの強調と対立 松本 博一 他 高文堂出版社
小さな国の大きな開発 失延 洋泰 勁草書房

計 量 経 済 学

予測のための統計学
 B. ビガニオル 晃洋書房
 消費者物価指数のしくみと見方
 総務庁統計局 編
 経済・経営指標を用いた統計データの読み方
 杉山 高 他 東洋経済新報社

財 政 学

財政構造とマクロ経済分析 フェルドスタイン
 東洋経済新報社
 売上税法を斬る 不公平な税制をたたく会
 労働教育センター

金 融 論

金融 CP=コマーシャルペーパー
 古川 顕 他 有斐閣
 川村 雄介 有斐閣
 わが国の金融制度 日本銀行金融研究所
 日本信用調査

産 業 経 済

証言・高度成長の日本 上・下
 エコノミスト編集部 毎日新聞社

マ ー ケ テ ィ ン グ 論

マーケティング論 深見 義一 編 有斐閣
 マーケティング戦略の実際
 水口 健次 日本経済新聞社
 サービス産業の発想と戦略 野村 清 電通
 生活者マインド・マーケティング
 女性マーケター研究会 日本能率協会

簿 記 原 理

企業簿記概論 菊地 和聖 森山書店
 入門簿記会計 松尾 憲橘 森山書店

会 計 学 各 論

意志決定会計論 鈴木 義夫 森山書店
 分析一会計論 増谷 裕久 中央経済社

会 計 学

企業会計と商法 江村 稔 中央経済社
 会計理論の基礎 吉田 寛 森山書店

政 治 学 原 論

日本政治の座標 三宅一郎 他
 有斐閣

政 治 学 史

日本文化のかくれた形 加藤 周一 他
 岩波書店
 近代天皇制の支配秩序 鈴木 正幸
 校倉書房
 天皇制と軍隊 藤原 彰 青木書店

政 治 学

大太平洋戦争史論 藤原 彰 青木書店
 沖縄戦争——国土が戦場になったとき
 藤原 彰 青木書店
 満蒙開拓青少年義勇軍 山田 健二
 図書刊行会

行 政 法

行政法判例(改訂版) 広岡 隆 他
 有斐閣
 日本行政法(上)(中) 田村 浩一 他
 晃洋書房

地 方 自 治 法

地方制度小史 亀卦川 浩 勁草書房
 地方制度史論 都丸 泰助 新日本出版社

地方財政論

改正 地方財政詳解 地方財務協会
地方財政要覧 地方財務協会

教育心理学

ピアジェ理論と教育 波多野 完治 国土社
事例で学ぶ教育心理 杉原、海保 他 福村出版

担任が行う生徒指導・教育相談 金子 保 日本文化科学社

教育法

指導細案の作成と実例 授業技法研究会 学習研究社
発問、助言、指示の技術 久喜 吉和 明治図書
観察・参加・実習・教師養成研究会 学芸図書
中学校総合社会科の構想と展開 本原、宮崎 編 明治図書

道徳教育の研究

道徳教育実践上の諸問題 日本道徳教育会 博文堂書店
日本道徳思想史 家永 三郎 岩波書店

保健体育

運動処方の実際 池山 晴夫 大修館
健康のためのスポーツ医学 池山 晴夫 講談社
運動とからだ 朝比奈 一男 大修館
エイズとガンの免疫学 近藤 元治 HBJ出版

倫理学

倫理学基本 山崎 照雄 有信堂高文社
転換期の倫理 伊藤 友信 他 北樹出版
現代の倫理 穴水 恒雄 他 青木書店
価値と人格 小倉 貞秀 他 以文社
倫理学 岩崎 武雄 有斐閣

情報処理

電子計算機と情報科学 (第2版) 吉田 良教 他 共立出版
Tronからの発想 吉村 健 岩波書店
PC-9801 パソコン プログラミング 500題 田中 広 日刊工業新聞社
PC-9801 3次元グラフィックス入門 守川 穰 アスキー出版局
PC-9801 Vm 21 VX プログラミング&オペレーション入門 ナツメ社

生物学

さまよえる遺伝子 河野 晴也 培風館
生命の操作 リグレ、D、G 培風館
物質と生命 野田 春彦 培風館
細胞の起源と造化 中村 運 培風館

化 学

- 生活と自然科学 吉田 幸弘 裳華房
 化学生活シリーズ 1 元素の話 齊藤 一夫 培風館
 化学生活シリーズ 2 金属の話 井口 洋夫 培風館
 化学生活シリーズ 3 火の話 足田 弘 培風館
 化学生活シリーズ 4 気体の話 石崎 義衛 培風館
 身の廻りを化学の目で見れば

加藤 俊二 化学同人

- 非金属の化学 ジョリー, I. W. 東京化学同人
 エンザイム H. guffreund 化学同人

生 化 学

- 化学実験法 畑、杉山 他 東京化学同人
 目で見る生化学 J. エデルマン 他 三共出版

栄 養 学 総 論

- 栄養学 20 章 吉川 春寿 東大出版会
 食欲の科学 河村 洋二郎 医歯薬出版
 ホルモンレセプター 加藤 順三 東大出版会

栄 養 学 各 論

- 歯の健康と食生活 浜田 茂幸 第一出版
 離乳の基本 今村 栄一 編 医歯薬出版
 寿命と栄養 中川 一郎 第一出版

図説 運動生化学入門

伊藤 郎 他 医歯薬出版

栄 養 指 導

- 健康教育・栄養教育 宮坂 忠夫 他 光生館
 患者ケア・食事指導のための疾患と検査のポイント 椎名 晋一 医歯薬出版

栄 養 生 理

- 生体膜と生体エネルギー 香川 靖雄 東大出版会
 生体の調節機構 石橋 貴昭 他 共立出版
 メカニカル・マン ウルドリッジ, D. E. 東京化学同人

食 品 学

- 米・大豆と魚 藤巻 井上 他 光生館
 オリザニンの発見 齊藤 実正 共立出版
 酒飲みの科学と健康 豊田 清修 共立出版
 蛋白質の化学修飾 上、下、大野 素徳 学術出版センター

食 品 化 学

- 食品と解毒の化学 小柳 達男 共立出版
 色素・香味・組織 エスキン, N. A. M. 医歯薬出版

食 品 学 食 品 学 実 験

- 還元糖の定量法 福井 作蔵 学術出版センター

蛋白質の分子量・分子形

林 勝哉 学術出版センター

脂質分析法入門

藤野 安彦 学術出版センター

S-H基の定量法

松本 博 学術出版センター

ユートピアと食生活

田村 真八郎 農文協

食生活論

足立 秋山 医歯薬出版

生 活 科 学

脳と神経の生物学

伊藤 薫 培風館

光と植物

柴田 和雄 培風館

消 費 科 学

消費者教育

日本消費者教育学会 光生館

家庭科における消費者教育指導の実際

藤枝 恵子 家庭教育社

約束食事箋による栄養管理

医師薬出版

タンパク質と酵素

大井 龍夫 培風館

免疫と生体防御

山村 雄一 他 培風館

応用微生物学

河野 幸又 他 培風館

公 衆 栄 養

食料・栄養・健康 86年、87年版

食料栄養調査会

環 境 学 実 験

免疫学実験入門

松橋 直 学会出版センター

植物細胞育種入門

平井 篤志 他 学会出版センター

日本食べ物新知識

真道 永次 富民協会

中学・高校家庭科「食物」の教育実習指導の体験と指導

土屋 治美 家政教育社

食 品 加 工 貯 蔵

食品加工貯蔵学

飯屋 園 璋 他 朝倉書店

食品加工貯蔵学実習

飯屋 園 璋 他 朝倉書店

食品加工実験・実習

箕口 重義 他 建帛社

発酵食品

中野 政弘 光 琳

食 品 材 料

蛋白質の旋光性

浜口 浩三 学術出版センター

S-H基の化学修飾

石黒 正恒 学術出版センター

高等植物の二次代謝研究法

南川 隆雄 学術出版センター

食 品 管 理

給食管理必修

赤羽 正之 他 医歯薬出版

給食施設と栄養管理の実際

西岡 葉子 他 学建書院

食 生 活 論

食生活論

根岸 内藤、同文書院

日本人の食生活史

下田 吉人 光生館

調理学の実験

調理の科学 山崎杉田浩一 医歯薬出版
フローチャートによる調理科学実験・実習
金谷 昭子 他 医歯薬出版

家政学原論

家政哲学 関口 富左 他 家政教育社
家政学原論 仙波 千代 他 光生館
家政学序説 藤 藤本 満子 昭和堂
改訂 家政学概論

家庭科教育法

家庭科の授業研究 吉原 崇恵 他 昭学術図書
家庭科の授業設計

村田 泰彦 他 家政教育社

現代家庭科教育法

木村 温美 他 家政教育社

被服管理学

被服整理学 野上 与志子 他 建帛社

被服整理学 — その実践 —

吉永 フミ 他 光生館

被服整理学 東京都私立短期大学協会 編

衣料学 岩本 秀雄 他 日本繊維センター

染色 理論と実技 染色教育研究会 編

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

被服材料科学

確かな目を育てる図説 被服の材料 高野 義典
被服材料学 森 昇 他 ぎんえい出版

意匠工芸学

American Costume 松本 敏子 他 関西衣料生活研究
万葉集の服飾文化 小川 善安朗 六興出版

被服構造学

人体を測る 小原 二郎 他
女子用衣料サイズシステム J I S 衣料サイズ推進協議会

被服整理学

被服整理学 野上 与志子 他 建帛社

被服整理学 東京都私立短期大学協会 編

衣料学 岩本 秀雄 他 日本繊維センター

染色 理論と実技 染色教育研究会 編

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

繊維試験法のすべて 日本繊維センター

繊維試験法のすべて 日本繊維センター